２０２４年６月３０日（聖霊降臨後第６主日、特定８、Ｂ年）
牧師メッセージ
「ただ、信じなさい」
（マルコによる福音書5:21-43）

司祭ヨセフ太田信三

今週も先週に続き、奇跡の話しです。嵐を静めた神の力は、命をも支配します。人は時に、「これは神でも無理だろう」「神とて、死には勝てないだろう」という思うものです。ことに、苦しみや困難の中ではなおさらそう感じるでしょう。そのような時には、どのような説明も慰めの言葉も、力を持ちません。だからこそ、イエスは端的に、「タリタクム、起きなさい」「ただ、信じなさい」とだけ語るのです。そしてその端的な言葉によって、絶望の先、「もう終わりだ」の先の希望の光が、わずかにも差し込むのです。なぜなら、「これは神でも無理だろう」「神とて、さすがに死には勝てないだろう」という呼吸もできぬほど隙間のないところに、例外無き神の思い、つまり自分の中からは生まれることない神からの「可能性」が与えられるからです。神は例外なく、死を超えて、人を命の方へ、希望の方へと導く方であることを「ただ、信じる」道がそこから広がります。

信じることが出来なかった人々へのイエスの要求はとてもシンプルなものです。「信じなさい」。先週の福音では、弟子たちは「恐れ」ゆえに信じることが出来ませんでした。彼らはこれまでにも、奇跡を見てきたし、教えも聞いていました。しかし、そんな弟子たちであっても、嵐を静めるイエスに恐れをいだき、「いったい、この方は何者なのだろう」という疑問を与えられました。自分の了解可能な範囲でイエスを捉えよう、またその背後にいつもおられる神を捉えようとしても、それは出来ません。神はわたしたちの想像や了解可能な範囲に収められるほど小さくないからです。だからこそ、旧約聖書では神に名前をつけることを禁じています。名前をつけた途端、神を名前の中に閉じ込め、自分の了解可能な範囲に引き下ろしてしまうからです。その神はもはや神ではなく偶像です。そうしないために、旧約聖書では、たとえば「熱情の神」などのように、「形容詞」によってのみ呼ばれます。そしてそのパターンは５００以上にも及びます。それほどに、神は人間には捉えきれるものではない、ということです。

今日の福音では、人々は「死」という現実に直面しています。死こそ、人間の了解可能な範囲外へと、身近な人が行ってしまう出来事です。だからこそ、人はその人との永遠の別離を感じ、深い喪失感に支配され、まして復活などということを信じることなど到底出来なくなってしまいます。わたしたち人間はどうしても、分かる範囲、想像できる範囲の中でしか、「信じる」ことが出来ないのです。しかし、わたしたちはあらためて立ち返りたいと思うのです。神を自分の了解可能な範囲に収めるのではなく、分かり得ないものとして、しかし必ずわたしたちに「命」を、「希望」を与えてくださる愛の神であることに立ち返りたいのです。神は時に人知を遥かに超えた方法によって、わたしたちを愛によって生かしてくださいます。